The 10Th Anniversary Essays

IJSHS　発刊 10 周年を迎えて

現編集委員長　伊藤　章
大阪体育大学教授

IJSHS は日本体育学会会員や世界のスポーツ科学の研究者に支えられ、第 10 巻を発刊する運びとなった。IJSHS の創刊当時の関係者や歴代の編集委員長・編集委員の方々のご苦労は想像に難くない。IJSHS を支える私たち体育学会会員にとって、その間の歴史・出来事を記録し知っておく必要がある。そこで、僭越ながら現編集委員長の私が、日本体育学会理事会において、上記の方々から IJSHS の創刊やその後の発展の道筋に関する原稿をいただき IJSHS に掲載することを提案したところ了解を得た。本特集が IJSHS のさらなる発展の礎となることを期待したい。

***** The 10Th Anniversary Essays *****

ＩＪＳＨＳ創刊のいきさつについて

小林　寛道
東京大学名誉教授

体育学研究では、アブストラクトを英語にして発行していたが、英語版がほしいという希望があり、英語版の体育学研究を発行した経緯があった。

日本が世界の第 2 経済大国であった当時、アメリカやヨーロッパの学術論文誌に日本人が投稿して論文が掲載されることが、研究者としてのステータスを得る最も有力な方法であった。現在でも同様で、外国の学術雑誌、または国際的にレベルの高い学術誌に投稿論文が採用されなければ「博士」の学位を授与しない、という学内申し合わせ事項を堅持している大学もある。

外国の著名な学術論文誌は、それぞれの学会が母体となって発行されており、英文で発行されている学術誌は、その読者数が多いので、当然、社会的な影響力も大きい。論文掲載が難しい学術誌を目指して、研究者が切磋琢磨することは、重要なことである。

ところで、このことは、世界的トレンドである「グローバリゼーション」に関連するものであり、欧米の学会の価値観や価値基準への「同一化」を目指している動きに他ならない。「科学的普遍性」や「科学には国境はない」というまっとうな科学論を掲げる人たちにとっては、正論である。

しかし、「グローバリゼーション」が進行する中で、一方では、「アイデンティティー」の主張を価値あるものとして認める考え方がある。この「アイデンティティー」をどのように主張し、どのように国際社会から認められるかが、重要な文化的内容を持つことになる。

体育学・スポーツ科学がカバーする研究分野はあまりにも広い。文化系から理科系、複合領域まで含み、その研究テーマや研究内容が、ほかの外国学会の学術誌ではマッチングしにくい内容のものも少なくない。

我々日本人にとって、国際的に何の障壁もない内容の自然科学的手法の研究もあれば、そのような理解が得られにくい分野や研究内容、または研究手法もある。しかし、それを学問的に価値があるものとして、論文化し、それを日本体育学会自ら発信する行為も「アイデンティティー」を主張する上で必要な行為であると考えられる。

国際誌の発行に当たっては、ずいぶんいろいろな意見が出され、反対する人も少なくなかった。しかし、以下のような論理と財政的な基盤を確立することによって、日本体育学

会の国際誌は発行されることになった。

１．国際誌としての性格を明確にするために、各専門領域に関する著名な研究者に編集委員を依頼する。（外国人研究者は、喜んで就任を承諾してくれた。）

２．投稿論文は日本語でよい。日本語での査読にパスしたら、英文に翻訳する。翻訳料は日本体育学会が補助する。（論文掲載の奨励と会員のメリットを優先する。）

３．財政的には、社団法人としては、大きな金額の保有が認められない制度になったので、保有されてきた予備金を国際誌の発行に充てる。（予備金のストックは十分であった。）

４．国際誌を発行しても、体育学研究は従来通り発行する。

５．国外からの会員以外の投稿も認め、査読の対象にする。

６．将来資金が不足すれば、学会費の値上げを行う。

ここまでの結論が出るまでには、かなりの意見交換が必要であったが、理事会および総会での決定によって、国際誌が発行されることになった。創刊号の編集長には、大妻女子大学の大澤清二先生が就任した。

その後、いくつかの経緯があったが、会員諸氏の努力によって発行 10 年目を迎えることには感慨深いものがある。

IJSHS 発刊を支えて

寒川　恒夫
早稲田大学教授

会員に、国際誌の刊行は、長らく待たれていた。日本語による研究成果発表は、しょせん日本語の分かる人にしか読まれないからである。世界中で日本語を解するのは 60 人に一人である。日本語を第一外国語と定める国もない。このままでは、せっかくの宝も埋もれてしまう。日本人のすぐれた研究を世界に発信したいと願う会員は、早くから多くいた。具体的な動きが始まったのは、創刊号発刊の３年前であった。理事会に、刊行にかかわる問題検討特別委員会が１年の時限で設置された。そこでは、今日行われる形の国際誌の内容が決定されたが、早期に IF（Impact Factor）ポイントをとるべきことが申し合わされた。これは、しかし、IJSHS が人文社会科学から自然科学までを包含する総合誌であるだけに、困難との声も聞かれた。現に IF ポイントをもつ国際誌は、多く、個別分野のものであった。しかし、総合性こそスポーツ科学の質であり、強味である。かつて刊行準備に関わった一人として、編集委員会の奮闘を期待したい。

***** The 10Th Anniversary Essays *****

創刊 10 周年に寄せて

「IJSHS 初代編集委員長として（2003 年）」

大澤　清二
大妻女子大学大学院人間文化研究科長・人間生活文化研究所長

IJSHS の創刊 10 周年、おめでとうございます。学術雑誌には内容の先進性に加えて真実性、独創性が求められるのはもちろんですが、さらに現代では素早く、全世界に公開することが不可欠になっております。こうした条件を満たすために、10 年前に、日本体育学会はインターネットを通じた英文のオンラインジャーナルを創刊しました。体育学会は設立半世紀以上が経過して、ようやく世界の大海に漕ぎ出したのです。これはこの学会にとって期を画する英断でした。現在では、この科学誌に掲載される研究論文はアジアをはじめ、世界中で読まれております。この雑誌に論文を掲載することは若い研究者にとってはひとつの目標になってきました。さらに、今後の 10 年間は論文の量的な拡大が課題となりましょう。日本をはじめとするアジア諸国の会員諸賢の旺盛な投稿を期待しております。

***** The 10Th Anniversary Essays *****

スポーツ実践研究分野において IJSHS への期待

第 2 代編集委員長として（2004-2006 年）

福永　哲夫
鹿屋体育大学学長

私が東京大学大学院生の時(1967 年頃)、当時、教育学部・体育研究室の猪飼道夫先生が「日本にも体育学の国際誌が必要になるだろう」とおっしゃっていたことを思い出す。日本体育学会の国際誌 IJSHS が発刊されてから 10 年が経過し、その間、337 論文が掲載されたことを知ったら猪飼先生はきっと喜ばれたことと思う。

日本体育学会は‘スポーツを含めた身体運動’を自然科学的、人文学的、社会学的な分野において研究することを追求し、IJSHS はそれら分野の研究論文を受け入れてきた。実際、このように複合的な分野の論文を掲載する科学ジャーナルは稀である。最近では、体育学やスポーツに関する研究を、自然科学系、人文学系、社会学系それぞれの専門領域へ分けてしまうことが非常に一般的であり、これによって数多くの科学誌が産まれてきた。それゆえこれら 3 つの分野をひとつのジャーナルへ統合していることが IJSHS をより価値があり稀有な存在としているのである。

しかし、体育・スポーツ実践領域の研究においては、これら既存の 3 つの分野に含まれない場合が多々ある。例えば、オリンピック選手の競争力を高めることを目的とした研究においては、人間の能力の限界を広げる様々な取り組みが、研究論文として受け入れられることは決して多くはない。私はこれらの経験的、直観的なものをベースとし、現在は掲載されないままでいるこの大変価値ある研究領域が「スポーツ実践研究」の分野と呼ばれるべきだと考える。また IJSHS のようなジャーナルがこのスポーツ実践研究の論文を受け入れる必要があるとも考えている。

***** The 10Th Anniversary Essays *****

IJSHS 第 3 代編集委員長として（2007－2008 年）

友添　秀則
早稲田大学教授

IJSHS の創刊 10 周年、おめでとうございます。私は 2007～8 年度の編集委員長を務めさせて頂きました。私の編集委員長時代の IJSHS を人間に例えれば、ちょうど、IJSHS が青年期に入って大きく成長を遂げようとした時期であったように思います。

創刊からまだ余り時間は経っていませんが、今では、多くの会員が覚えておられないかと思いますが、私が編集委員長になった頃までの IJSHS は英文の学会誌にも関わらず、日本語と英語、両方の投稿論文を受け付けていました。日本語での投稿の場合、日本語論文で審査・査読し、掲載可の判定が出たら、それを学会の経費で英語に翻訳していました。

日本語での投稿を設けたのは、若い研究者に経済的負担をかけることなく、積極的に投稿してもらい世界に発信していくことを促したい、との草創期の編集委員会の熱い思いがあったと伺っております。また、体育学やスポーツ科学についての日本語から英語への翻訳者の能力を向上させることによって、この領域の専門翻訳者を育成し、日本の研究成果を広く世界に発信していく地盤作りをしたいとの考えがあったとも伺っています。

しかし、私が編集委員長の時に編集委員会での議論で、翻訳された英語論文とオリジナルの日本語論文とでは、両者は違うものになるのではないかとの意見が出され、いろいろ審議を重ねた結果、日本語での投稿を廃止するに至りました。

ところで、編集委員長時代の最大の思い出は、当時は勝美印刷という印刷会社に投稿受付、査読手配、審査投票の整理、印刷までのすべてをお願いしていましたが、和文誌の「体育学研究」のオンライン化と J ステージの移行に合わせて、IJSHS でも「体育学研究」同様、J ステージで投稿審査システムの全てをオンライン化することが理事会で決定し、その準備作業に追われたことです。

当時、J ステージの外部委託業者が地下鉄半蔵門線の水天宮の駅前にあり、平野裕一・副編集長（国立スポーツ科学センター）、川上泰雄・副編集長（早稲田大学）、吉永武史・編集幹事（早稲田大学）と何ども足を運び、打ち合わせをしました。ただ、J ステージ側の都合で、オンライン化を決定している他の学会の学会誌との順番待ちで随分待つことになりました。また、オンラインでの投稿審査システムの確立のために、私と上記３人の先生方とで実際のパソコンから架空の投稿を昼夜を問わず何度も行い、不備を確認したり、問題点の解決を委託業者にお願いしたりで、私たちもはじめての経験で何度も失敗や試行錯誤を重ねながら、時間ばかりが過ぎていくことに強烈な焦りを覚えました。

試行錯誤の準備作業を懸命に行い、オンラインでの投稿審査のシステムを確立していく

途中で、私たちがこれまで行なってきた投票システムがＪステージの機能にないことがわかり、これだけを勝美印刷に再度依頼するか、新たな業者に依頼するか、それとも体育学会事務局でメール投票で行うかの問題にいきあたり、業者から見積もりをとったり、４人で何度も相談したりで、随分大変な時期を経験しました。

ようやく新しいシステムへの見通しが立ち始めた頃、それまで中心的な役割を担ってくださった川上泰雄先生が在外研究に出られたので、京都大学の神﨑素樹先生に代わりをお願いし、作業をすすめることになりました。結局、経費や利便性を考え、投票システムは体育学会事務局で行うことになり、ようやくＪステージへの完全移行が完成しました。

毎日の投稿を受け付けながらの移行作業だったので、まるで綱渡りのような毎日でした。今から思えば、本当にうまく切り抜けることができたなあ、との気持ちでいっぱいです。

最後になりましたが、当時の編集委員会の編集委員の先生方には大変お世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございました。

IJSHS の一層のご発展を祈念いたしております。

***** The 10Th Anniversary Essays *****

第 4 代編集委員長として（2009－2012 年）

伊藤　章
大阪体育大学教授

編集委員長を 2009 年に指名され、副編集委員長の菊　幸一先生（筑波大学）と矢内利政先生（早稲田大学）、そして幹事の石川昌紀先生（大阪体育大学）とともに現在まで二期を務めている。我々と同時に、IJSHS 専任事務局員も就任した。この人事は編集活動を円滑に進めるために大変役立っている。私以前の編集委員長は、事務的な作業など大変苦労されたと思う。

一期目では、編集活動を進めるにつれ、万全と思える投稿規程や投稿の手引き、そして審査手順などに改正すべき点がいくつか発見された。そこで、和文と英文との整合性も含め修正することに終始した。

二期目では大きな改革を試みた。IJSHS と体育学研究との間で二次出版を可能とする規定を整備することであった。これは、例えば IJSHS（体育学研究）に掲載された論文を、二次出版と明記して体育学研究（IJSHS）に掲載することを可能とするものである。その目的は、読者層の異なる両誌に論文を掲載することによって、研究成果を国内外により広く還元することである。理事会ではその是非について議論が沸騰したが、目的が理解され 2011 年の臨時総会において承認された。投稿者であり読者でもある体育学会会員にとって有益な規定だと思う。

論文審査が厳しすぎるという指摘など課題は山積しているが、今年度で我々編集委員会の任期は終了する。時期的に、総会の承認を得なければならない課題に関しては次期の編集委員会に申し送らざるを得ない。そのスムーズなバトンタッチが最後の大きな仕事となるだろう。最後になりますが、編集活動に協力いただいた委員各位、審査を引き受けていただいた皆様に感謝いたします。